



初春

清々しい初春をお迎えのことと思います。年頭にあたり読者の皆さまのご多幸を祈念いたします。

静寂さと厳かさを雪景色でなお一層増している深山幽谷の地。

正月の諸行持を綿密に勤め、下旬には道元禪師さまの生誕を祝う法要「高祖大師降誕会」併せて徳風を仰ぎ、ご遺徳に報いるために「報恩講式」が営まれます。

既に亡くなっている方の誕生を何故お祝いするのか？ それは「誕生」がすべての始まりだからです。

正治二年の初春（一二〇〇）年の二十六日に京都でお生まれになった道元禪師（幼名 文殊丸）この方の誕生がなかったならば、曹洞宗はもちろんのこと永平寺さえなかったかもしれない。

『よくご生誕くださった』と私たちはお慶び申し上げるのです。時は下りますが、道元禪師のお師匠さまである如浄禪師（中国南宋時代・天童山住職）の教えを余すことなく、欠けることなく受け継がれたからこそ今日の永平寺があり曹洞宗があるのでしよう。歴史の源を創るお方になった道元禪師の生誕に感謝の念が募ります。



大黒尊天

大本山總持寺の新年は大梵鐘の撞き初めから始まり、毎年三箇日で三十万以上の人びとが初詣に訪れます。

元旦は午前零時より大祖堂で禪師さま御親修の大祈祷会が修され、三宝殿や香積台こうしきんだいの大黒尊天では御祈祷が賑やかに行じられます。また大駐車場でも車の御祈祷が行われます。

最近とりわけ人気を集めているのが香積台・大黒尊天での御祈祷です。本山の大黒尊天は福德円満な微笑みを浮かべ、「鶴見七福神」として遠近より篤い信仰を集めており、豊穰・豊作・財富にご利益があるといわれます。

大黒尊天は長年の修行の結果大きな福德を得られましたが、その象徴がふくよかな微笑みと肩に担いだ袋です。

その袋から福德の種を取り出して人びとの願い事をかなえ、人びとに施すことによって更に福德が増しているのです。

本山では冬安居とうあんごと称される百日間の集中修行が正月十日過ぎに解制かいせい（終了）を迎えます。冬の厳しい修行を成し遂げた修行僧たちの明るい表情が、大黒尊天のそれと重なり合っって見えるのも横浜鶴見の風物詩と申せましょうか。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

晚涼の一灯として我が家存在り

宮城県 阿部 徳夫

評 昼の暑さも和らぐ夕暮れ。一日終えた家路への先にあるさまざまな暮らしの灯。その中の一灯が我が家。「一灯」に待っていて呉れる家族と心の安堵が窺え、リズムもなめらかなで句の姿が良い。

一斉に園児の気付く鬼やんま

北海道 福島 真也

評 蜻蛉せいらんの中でも一際大きく堂々と威風を放つ鬼やんま。園児等の視線がその鬼やんまに集まった。十七字に園児や鬼やんまの映像の動きまで見える。表現は自然体で楽しい句となった。

◆花咲きぬ亡き娘むすめの蒔きし鳳仙花 岩手県 藤島 典子

◆遠雷はまだ雲の中帰途急ぐ 佐賀県 池内 淳子

◆袈裟脱げば一農夫たり芋を掘る 岩手県 上沖 貞子

◆水受けの水なみなみと秋澄めり 愛知県 松井 暁美

◆ほこほこと独りにやさし衣被きぬかぎ 宮城県 木村とみ子

◆仏壇の妻に声かけ稲刈いねかりに 静岡県 富岡 一郎

◆和やかに糸絡ませて鯊日和はせびより 東京都 伊奈 三郎

◆今日の月ついてくるからつれてゆく 静岡県 村松 保子

◆逝く秋の余生に病憑やまき易き 宮城県 鎌田登喜子

◆雅楽の音静かに流れ無月かな 鳥根県 浅津 英彦

*選者吟

見る人も万歳顔となりゆけり

五灰子

*作句小見

しろたへの羽子日に入るやまはりつつ 坊城 俊樹

曹洞俳壇前選者の故坊城としあつ師のご令息の句。

あけましておめでとうございます。

本年も皆さまの御投句を楽しみにしております。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

両隣しばし疎遠の雪囲い春まで長き冬のは
じまる

秋田県 小田崑恭葉

評 雪の多い土地では大雪から家を守るため、家の周囲、庭木などを孤や簀などで囲う。外界に対し身構えるその行為は、しばし両隣との心の距離も遠くする。「しばし疎遠の雪囲い」が、その距離を言い得て妙である。

北風のそよ吹く宵はさやさやと垂れ穂揺ら
して稲架稲乾く

岩手県 穴戸さとる

評 北風に対し「さやさや」と「そよ吹く」という表現がなされ稲作に従事する作者の立場が見えて、充足した安堵感が伝わる。乾いた北風の効用を知っていればこそその措辞。

◆ 風立てばドミノ倒しに葉裏見せ稲田は白くうねりて光る

山口県 浜田 道子

◆ 生涯に定年なしと稲を刈るふる里の友被災に負けず

東京都 鈴木 正作

◆ 笛を吹く少年ありき阿武隈川の穂芒揺るる月の堤に

福島県 大槻 弘

◆ 母逝きし十二の夏の蟬しぐれ半世紀後の今も聞こゆる

東京都 津久井すみ子

◆ 木屋の香りの中を行きし子よ枕にへこみ残したままで

茨城県 太田 弘美

◆ 分類のさだかならざる資源物仕分けしている野分きたつ朝

三重県 野呂 志

◆ 亡き義母の手さばきの良さ思い出し真似て彼岸の花束つく

京都府 稲積 照子

◆ 身につけし早寝早起きそれ故に夜長の寂しさ逢わずに覚

三重県 小阪 晋

◆ 邯鄲の声に今夜は妲の夢眼閉じれば笑む妲浮かぶ

新潟県 星野 三興

◆ ささいなる希かなひし朝の庭赤あきつひとつ舞ひまひてをり

愛知県 前田 操

*選者詠

飛行機雲昼三日月を曳いてゆくその航跡を
北へと伸ばし
ちづ

*作歌小見

秋の爽りするときであり収穫の喜びにわく一方、冬の寒さに備える季節でもある。皆さまの投稿歌にも、そんな気構えが窺われる歌が多く見られた。東北の被災地にも二度目の冬がおとずれる。復興の進まぬなか仮設住宅の寒さに心が痛む。